

二〇二〇年度 中期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・配点詳細非公表】

【一】 説明的文章（論説）

日高敏隆(ひだか としたか)一九三〇年～二〇〇九年、東京生まれ。東京大学理学部動物学科卒業後、東京農工大学教授、京都大学教授、京都大学名誉教授。動物行動学をいち早く日本に紹介し、日本動物行動学会を設立。主な著書に『チョウはなぜ飛ぶか』『ネコはどうしてわがままか』『生きものの流儀』などがある。迫る温暖化に、生き物たちはどのような影響を被っているのかを、自然を見つめる目から書いたエッセイ。二〇〇七年新潮社から初版発行された『セミたちと温暖化』からの出題。

問一 漢字の読み・書きの問題

- a 栽培 b 乾燥 c 狭
d なりわい e 緊急

漢字は正確な読解を支える基本の力。語彙の成り立ち・構成も意識した学習を重ねるとより読解力が高まる。例えば d 生業(なりわい)は「生活を営むための仕事」という意味であり、「業」は一字で仕事・技という意味を持っている。

漢字を学習することは、単に漢字を読み書きする力を身につけるためだけでなく、①音訓の読み、②語句の意味、③構造(部首・画数・字源)、④書く(筆順・字形)、⑤熟語・同音異字・対義語・類義語など、漢和辞書や漢字辞典を活用し、積極的に探求的な学習を通せば、言葉や文をあつかう力、国語力を高めることにつ

ながっていく。

問二 表現技法

擬人法が正解。比喩表現の一つで、人間以外のものを人間に見立てて表現する方法。比喩表現は、直喩・隱喩(暗喩)・擬人法とある。それぞれの理解を深めよう。評論読解において比喩表現は筆者の具体例が示すものを捉え、主題の理解につながる大切なヒントとなる。「何を何に例えているか」を考えながら読むことで、筆者の主張を捉えられる。

本文ではアム、シル二つの河に「養われる」が、人間に見立てている表現である。アラル海がこの二つの河だけによって維持されている湖であることを例えた表現。

問三 内容理解の問題(因果関係①)

空欄補充は前後の文脈の理解が問われる。筆者の論理が捉えられているかを問うている。Ⅰはその後アラル海がどんどん小さくなった要因なので、「水が大量に減った。」となり、Ⅱは水が減ったことが要因で「急速に塩度が高まった。」となるため、Ⅱが要因となり「魚たちもやがて絶滅した。」となる。空欄の前後、論理のつながりを確認すれば正解が導ける。

問四 内容理解の問題(因果関係②)

湖と土地を失った直接の要因はア砂漠の灌漑事業であり、それに伴って起こった土の塩性化も本文で示されている。イ漁業の発展とオ森林伐採は本文中で言及

されていない。地球温暖化は影響の一つではあるが、直接的要因として述べられていないので、不適。よって正解はイ・エ・オ。

問五 口語文法・品詞の識別の問題

文節分けや単語分けを行う力は、正しい文章理解につながる大切な力である。また、高校入学後の古典学習では品詞の識別は重要度が高い。文の成分(主語・述語・修飾語・接続語・独立語) 品詞(動詞・形容詞・形容動詞・名詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞・助詞・助動詞)をきちんと理解しよう。

本問題は、消滅せ(動詞の未然形)・ざる(打ち消しの助動詞「ず」未然形)・を(助詞)・得(動詞「得る」の未然形)・ない(打ち消しの助動詞)となる。「ない」は形容詞と助動詞の見分けに気をつけよう。自立語ならば形容詞、付属語ならば助動詞である。

問六 内容理解(同義、一般と具体)

「同じタイプの問題」は前述のインドと中国黄河が流域でおこっている問題を指す。農業用地下水の汲み上げにより地下水の水位が下がり、より深くから水を汲みあげるための費用が莫大(ばくだい)になったため農業を離職する人が増えた問題のことである。

水不足に加え、農業従事者が減る問題も世界的な規模で起こっている。

問七 内容理解の問題(部分要約)

「つまり」は言い換えの接続詞であり、「結局」や「最終的には」等と同義の語。前述の「アラル海の例」の内容を捉えて選択する。アラル海は水不足の問題を灌漑で乗り越えようとしたが、広大な湖と土地の両方を失う結果となってしまった、いわば「人為による負の事例」である。その他同様の問題として中国やアメリカの例もあげられており、その共通点が、問題解決を水のあるところから持つてくるという手法に頼ったことである。選択肢エが正解。

【二】 文学的文章(小説)

重松清(しげまつ きよし)一九六三年、岡山県生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、出版社を経て、フリーライターに。二〇〇一年『ビタミンF』で第124回直木賞受賞。『ピフォア・ラン』『疾走』『流星ワゴン』『小学五年生』など著書多数。学校を舞台に十代の心情を描いた小説が多く、多くの作品が映画化やドラマ化されている。

二〇〇七年文藝春秋から発刊された『小学五年生』に収められている短編小説「ライギョ」からの出題。

問一 漢字の識別

a 「ゾウキン」は「雑巾」と書く。アは「愛憎」、イは「増殖」、ウは「増幅」、エは「雑煮」で、正解はエとなる。

b 「カクトウ」は「格闘」と書く。アは「画策」、イは「革新」、ウは「格別」、エ

は「確実」で、正解はウとなる。

c 「カンシヨク」は「感触」と書く。アは「職務」、イは「払拭」、ウは「接触」、エは「装飾」で、正解はウとなる。

問二 副詞の働き

副詞の特徴は、自立語で活用がなく、主に用言(動詞・形容詞・形容動詞)を修飾する連用修飾語としての働きをする。また、副詞は、その使い方によって、状態・程度・呼応の三つの種類に分けられる。

Ⅰは文末に「くだろう」とあるので、推量の助動詞を伴う副詞「きつと」が正解。「きつとく…だろう。」呼応の副詞。

Ⅱは、文脈の流れから突発事態の発生を表す副詞「とつさに」が正解。

Ⅲは、文末の「釣上げていてほしい」という言葉の意味を強めたい働きとして、予想や想像と一致したときに使う副詞「やっぱり」が正解。

問三 語句の意味と用法

A 「うなだれる」には「心配、落胆、悲しみ、恥ずかしさなどのために気持ちが沈み込んで、頭を前に低く垂れる」の意味がある。少年が投げた石のせいで、タカギくんはため池に落ち、濡れたままの状態で釣りをしている。その状況に対し、本文では「早く家に〜自分のせいだ、」という少年のタカギくんに対する申しわけない気持ちがあるため、正解は「エ 罪悪感」が適当である。

B 「間の抜けた」は「することにぬかり

がある。ぼんやりする」という意味がある。おもちゃのカエルはライギョを釣り上げたという手柄を立てたにもかかわらず、「間のぬけたきよとんとした顔で少年を見つめていた」とあるので、ウの「とぼけている」が適当である。

問四 心情理解の問題

登場人物の心情を正確に捉えるための方法として、①登場人物の動作、②登場人物の表情、③登場人物の言葉や声の調子、④情景描写から捉える、という方法が代表的である。本文と丁寧に照合して、一つ一つの選択肢の正誤を確認しよう。

傍線部①「やっぱり〜また悲しくなった。」の「また」に着目する。

一度目の「悲しさ」は、あらすじの直後に「なにをやらせても〜悲しくもなつて、」とある。その「悲しさ」とは、あらすじの内容の中で「何をされても怒らないにぶいたカギくん」の部分や、石を投げられ、ため池に落ちた後も釣りを続けるタカギくんに対し、少年は悲しさを感じている。その「悲しさ」のなかには、少年は自分が投げた石のせいで、ため池に落ちてしまったタカギくんに対する罪悪感も含まれると考えられるだろう。二度目の「悲しさ」に該当する部分は、ライギョ釣りをしている際の餌について会話をしている場面。「でも、こんなおもちゃで釣れるとは思えない。」の直後にある。カエルのおもちやでライギョを釣ることは不可能であるにも関わらず、ライギョ釣りを続けるタカギくんに対し、「また悲しくなつてい

る。それらをふまえると、一度目と二度目の「悲しさ」にあたる原因の内容と、「悲しい」＝「心が痛む」の記載がある選択肢アが正解。

イ「新しい側面を発見してしまった」が誤り。「どんなときでもなにをやらせてもにぶいタカギくん」ということを少年はすでに知っている。

ウ「へこたれない」が誤り。タカギくんは「タカギ遊び」のターゲットにされてもまったく「怒らない」のである。また、「へこたれない」と根拠になる行動描写も本文中には描かれていない。

エ「軽べつしている」が誤り。「軽べつ」とは「相手をいやしいもの、劣つたものとして、バカにすること」の意味である。本文中に少年がタカギくんを「軽べつ」している描写はない。

問五 行動理由の問題①

ア「強い憤り」、イ「復讐心」の部分が誤り。本文中にタカギくんの「憤り」や「復讐心」を表現する描写はない。

ウ「没頭したい」と「うっとうしく」が誤り。傍線部②の直後に「さつき、石投げただろ」と、釣り以外の話題を突然少年に投げかけているセリフから考えると、「釣りに没頭したい」と読み取ることは考えにくい。そして、「うっとうしく」感じる根拠になるような描写も本文には描かれていない。

選択肢エが正解。傍線部②のあとに続く少年との会話の中で、「さつき、石投げたろ」というタカギくんの問いかけに、

「そんなことしてない！」と少年は嘘をつく。その返事に対し、タカギくんは「いいんだよ」と笑い、「サトウの弟も一緒だったろ。殴られるし」と、石を投げた犯人が少年とトモノリということを知っており、少年に文句を言ったところで、結局は学校でサトウに殴られることから、「タカギ遊び」が終わるわけがないと思っっている。「でも……」と何か言いたげな少年に対し、タカギくんは「怒ってないから」と言い切ったあと、「やっぱり、ほんもののいいよなあ」と笑いながら再び釣りの話題に戻って、釣りを続けている。

これらをふまえると、タカギくんは石を投げた少年を責めたところで、いじめがなくなるという問題解決にならないと分かっているため、いつも通り「何をされても怒らない」平然とした態度を貫こうとしている。また、タカギくんの「いいんだよ」、「怒ってないから」という少年を気遣うようなセリフと併せて選択肢エが適当である。

問六 行動理由の問題②

父親が釣ってきたライギョを少年がため池に入れる場面の後、「タカギくんがライギョを釣り上げる瞬間く見るのが嫌だった。」「信じた。絶対に釣れる。」「ライギョを釣ったら、なにかがかわってくれるといいな、と祈った。」とあることから、少年はタカギくんがライギョを釣って欲しいと強く願っている。ため池の水抜きの日、様々な魚が浅瀬の池から姿を

あらかず中でライギョが見当たらないことから、少年はタカギくんがライギョを釣り上げたと確信し、興奮してじっとしていられない様子が描かれている。

さらに、少年の願いが叶ったことを裏付ける証拠となるおもちゃのカエルを泥の中から発見し、作業服のおじさんからゴミなら捨てるよう促されるも、予想外の嬉しさからこみ上げてくる気持ちが「少年は笑って首を横に振り、泥の表面に染み出た水でカエルを洗った。」の部分に描写されている。少年は、ライギョを釣り上げたおもちゃのカエルのお手柄に対し、感謝やねぎらい、愛着を抱いているので、ゴミとして捨てるのではなく、泥の表面に染み出た水でカエルを洗うという行動をとっている。

問七 内容理解の問題（大意把握）

照合・消去法で一つ一つの正誤を判断しよう。

ア「タカギくんの優しさと純粹で素朴な性格」、「二人の間には友情に近い気持ちが生えてる」が誤り。タカギくんの人物像は「何をされても怒らないにぶい」としか描かれておらず、「優しい」「純粹」「素朴」とわかるような描写はない。また、少年とタカギくんの会話のやりとりの中で、ライギョや釣りの餌について会話が弾みそうな場面があるが、そのあとに続く会話の内容から考えると、友情が芽生えているとは言い難い。

ウ「少年は、ため池でライギョ釣りをしているタカギくんのことを父親に話す」

が誤り。本文で「タカギくんの話は隠してお父さんにライギョのことを訊くと」とある。

エ「少年とタカギくんはため池の水抜きに参加し」が不正解。ため池の水抜きには少年だけが参加している。

イが正解。あらすじの内容からわかるように、少年は同級生のトモノリが怖くて、言いなりになっている。だから「タカギ遊び」にも参加しているが、少年が進んでタカギくんをいじめているとは考えにくい。その少年の心情が、選択肢イの「トモノリからの子分扱いや『タカギ遊び』がなくなつてほしい」の部分に該当する。そして、その少年の心情が、タカギくんにライギョを釣つて欲しいという願いや、ライギョ釣りの手助けに反映されていると考えられる。

【三】古典（古文）

※出典※『伊勢物語』八十一段

「塩釜（しおがま）」からの出題。

『伊勢物語』は、平安時代前期の成立。

作者は未詳であるが、在原業平説、紀貫之説などがあり、現在では複数の作者によるとされている。日本最古の歌物語であり、約百二十五段の、和歌を主にした短編から成る。文体は各章段、散文と和歌から成り、よく人物の内面を語り、歌と相まって叙情性に富む。「昔、男ありけり」「昔、男」で始まり、男の初冠（元服）から臨終までを描いて、男の一代記風な構成になっている。

問一 基礎的な古語の理解

読解に必要な単語力の養成は日頃の学習から意識しよう。古文では古今異義語や古文独自の語が特に注意を要する。問いの「おもしろく」は基本形「おもしろし」で、目の前が明るくなり、心が晴れやかになる様子を表し、現代語訳は「風情がある」「素晴らしい」「興味深い」などに訳される重要語である。よって答えはイ。本文では左大臣の家の造りのあり様を表現しており、趣向を凝らして造られた家は色彩豊かで、訪れる人々がその景色を味わっている様子が描かれている。

問二 月の異名（古文常識）の問題

月の異名は基本知識。しっかり覚えよう。また、旧暦の月であるので現代の季節感とはずれが生じる。季節の区切り、春（一月～三月）夏（四月～六月）秋（七月～九月）冬（十月～十二月）とともに理解しよう。

一月（睦月）二月（如月）三月（弥生）
四月（卯月）五月（皐月）六月（水無月）
七月（文月）八月（葉月）九月（長月）十月（神無月）十一月（霜月）十二月（師走）

問三 内容理解の問題

傍線部を含む一文を確認すると、「十月の末ごろ、菊の花が色づいて盛りである上に、」という秋の庭の花が色づいている様子が描かれ、傍線部は、「もみじが、様々にみえる頃、」という現代語訳になる。秋の庭で、もみじの何が「さまざま」なのか、具体的にはもみじの「色」である。

問四 古文常識の問題

古文の世界において「遊び」は①神をまつるための歌舞・音楽。②（行楽・狩猟・酒宴などをして）楽しむこと、娯楽。③詩歌の楽しみ、管弦の遊びを表し、多くは③の意味で用いられる。本文でも秋の美しい庭を愛でるため酒宴を開き、和歌をよむ様子が描かれている。よって「詩歌をよみ、管弦の遊びをすること。」が正解。

問五 内容理解の問題（和歌の理解）

翁が和歌をよんだのは、問四で確認した「遊び」の場においてであり、順番としては和歌の直前に「人にみなよませ果てよめる」とあるように、その場の人々がすべて歌を出し、最後によんでいる。人々が何をテーマに歌をよんだかは、本文三行目「この殿のおもしろきをほむる歌よむ。」と示されている。左大臣の邸宅がいかに趣深く造作され、そこを訪れた人々を魅了したのかがわかるエピソードである。

問六 内容理解の問題（展開、指示語）

傍線部は翁のよんだ和歌の内容について後の世の人がつけた説明部分である。伊勢物語にはこのような説明が多く見られる。左大臣家にいた他の人々を含め、翁はこの左大臣邸の趣深さを和歌に読んでおり、「ここをほめて」の指す場所はイが正解。

問七 文学史・和歌の知識の問題

伊勢物語は平安中期の歌物語、作者未詳。在原業平とみられる主人公の元服から死までの一代記的構成。主人公の在原業平は教養、風貌、恋の道に優れ、当時の理想の男性像だった、といわれている。現存する最古の歌物語であり、後の歌物語だけでなく、「源氏物語」など後世の文学に多くの影響を与えている。

また、日本三大歌集である古今和歌集についての知識、六歌仙について、和歌の知識である歌枕など基本知識を問うている。

どれも古文学学習の際に教科書に記された知識だが、今後多くの古文を学習する上で時代の特徴や作品の流れを押さえることは内容理解につながる重要知識であるため、自主学習では国語便覧等でも確認するようにしよう。

【現代語訳】

昔、左大臣がいらっしやった。賀茂川のほとり、六条あたりに、家をたいそう趣深く造ってお住いになっていた。

旧暦十月の末のころ、菊の花が色変わりして美しく感じられ、紅葉がさまざまな色に見える折、親王たちをお招きして、一晚中酒を飲み、管弦の調べを楽しんで、夜がだんだん明けてゆくころに、一同、この御殿の趣深いことを賛美する歌を詠んだ。

そこに居あわせた卑しい老人が、縁の板敷の下をはいまわって、人々がみな詠み終わるのを待ってから詠んだ。

塩釜にいつのまに来てしまったのだろ
うか朝風の中釣りをする舟は
この私のいるところに寄って来て欲し
いものだ

と詠んだのは、陸奥の国へ行った時に、不思議で趣深い所が多かったのである。本朝六十余国のうちに、塩釜という所に及ぶ風景の所はなかったのである。それ故、かの老人は、この庭をことさらに賞賛して、「塩釜にいつか来にけむ」と詠んだのだった。